

氏名（本籍）	呉 柏良
学位の種類	博士（看護科学）
学位記番号	博甲第 7400 号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	An assessment with behavioral observation for social competence in Chinese university students (中国大学生における社会能力の行動観察評価)

主査	筑波大学教授	博士（医学）	高田 ゆり子
副査	筑波大学准教授	医学博士	山海 知子
副査	筑波大学助教	Doctor of Philosophy in Nursing	杉本 敬子
副査	筑波大学教授	博士（医学）	前野 哲博

## 論文の内容の要旨

### （目的）

本研究は中華人民共和国（以下中国と表記）の大学生の社会能力を測定するために、社会能力発達評価「成人用かわり指標」（IRSA）を用いて行動観察評価を行い、その有効性を検討した研究である。

中国では社会能力は 1990 年代から研究者の関心をひいていた。社会における対人交流は精神健康を肯定的に導くことが可能である一方、精神健康に否定的な結果を招く原因ともなる。そのため個人が生涯を通じて適切な社会能力を獲得し維持向上していくことは重要なことである。近年、中国の高等教育への進学率は増加している。一方、大学生の精神的問題も増加し、先行研究では精神障害を有する者 19%、精神的問題を持つ者 10.1%という報告がある。対人的相互作用がキャンパスライフのストレスの主因という先行研究や心理的問題の 40%が対人的な適応障害によるという先行研究の報告がある。そこで、①これまでの中国の先行研究における社会能力の定義は何か、そしてその定義と全般的な要素のなかの定義との違いは何か、②成人や大学生の社会能力測定のために開発された評価の種類と社会能力が不足している個人に対する介入は何か、③社会能力は 3 因子（assertion, coordination, self-control）構造とされているが、中国の大学生の社会能力を測定する指標として適切かどうか、の 3 つの仮説を設定した。その仮説を明らかにするために、本研究は part 1 と part 2 で構成した。Part 1 の目的は、中国大学生の社会能力の定義、評価、介入方法を先行研究から明らかにすることである。Part 2 の目的は、行動観察指標で

ある IRSA を用いて中国の大学生の社会能力を評価することである。

## 【Part 1】

### (対象と方法)

中国の文献データベースから成人・大学生を対象にして社会能力に焦点をあてた文献を分析対象とした。文献は、1980年から2013年までの China Knowledge Resource Integrated Database (CNKI)、China Science、Technology Journal Database (CSTJ)、Wanfang Data Knowledge Service Platform (Wanfang) を含む中国のメインデータベースから検索した。検索 keywords は、social competence, social skills, assessment, adult, and university student を使用した。

### (結果と考察)

成人や大学生を対象にした、社会能力の定義、評価、介入に焦点をあてた研究論文 20 が抽出された。社会能力を定義した論文は 13 論文で、そのうちの 4 論文は評価、2 論文は社会能力レッスンに関する論文であった。5 論文は評価について論述していた。8 論文は介入研究で、そのうちの 5 論文は統合失調症者対象の SST 介入研究で、3 論文は大学生の社会能力に関する論文であった。

その結果、社会能力の定義は、世界的にも共通している、個人が社会能力を獲得できたかどうかという効果、社会的相互作用、社会的文脈の 3 要素が含まれていた。しかし、定義の合意はみられなかった。データ収集の方法はセルフレポートが多く、行動観察によるものは認められなかった。また、介入では統合失調症患者への生活技能訓練は薬物治療と統合されて有効な介入であることが示されたが、加えて介入は適切な分析が必要であること、大学生の社会能力改善にはレッスンが必要であることが示唆されたことを論述している。そして、社会能力の定義を明らかにした行動観察に基づく評価は、今後の研究において社会能力の総合的な評価と適切な生活技能訓練と教育課程に貢献することが示唆されたと論述している。

## 【Part 2】

### (対象と方法)

対象は中国 X 大学の大学生 58 人で、2012 年 12 月～2013 年 1 月に調査を実施した。本研究における社会能力とは「社会的相互作用を通して、さまざまな状況において、良好な関係を維持しながら自己の目標を達成する能力」と定義した。方法はスティッキーゲームの実施と質問紙調査である。ゲームは 2 人～4 人 1 組となり、1 回 5 分間を 2 回実施した。スティッキーゲームは赤、青、黄色の 3 色の棒が支えあって立っている状態で、棒が倒れないように出来るだけ立った状態を維持しながら、参加者が交互に棒を引き抜いていくゲームである。ゲーム中の行動（表情、声、ジェスチャー）を観察することにより社会能力を評価するため、ゲーム実施中の様子は参加者の同意を得てカメラで記録した。自記式質問紙調査は、ENDCOREs、AQ(Autism Spectrum Quotient)、SSI(Social Skills Inventory)を実施した。ENDCOREs、AQ、SSI は、現在中国語版がないため、日本語版から中国語版を作成し逆翻訳を行った。

IRSA による行動チェックは 2 人の評価者グループで実施した。コーディングの精密度を確実にするために、評価者は以下の 3 条件を満たす者とした。①対象者の中国大学生の日常生活を理解できるように、評価者は中国文化が理解できること、②評価者は日本語で書かれた IRSA を使用することができ、中国大学生の相互交流の分析ができるために日本語と中国語が理解できること、③評価者は IRSA による行動観察評価のための社会的相互作用のビデオテープで訓練を受けた者で、行動観察評価が 90%以上

の一致度に到達するまで複数回訓練を行った。行動観察評価は、行動がない場合は1点、不明な場合は2点、1回認められた行動は3点、同じ行動が2回以上認められた行動は4点として得点化した。そして、IRSA92項目が中国大学生に適應できるか否かを検討するために、各項目の度数分布により検討した。その後探索的因子分析(EFA)を行い、因子構造の確認と項目の精選を行った。 $\alpha$ 係数により信頼性を検討し、基準関連妥当性、構成概念妥当性により妥当性を検討した。分析にはSAS 9.1.3を使用した。本研究は筑波大学医の倫理委員会の承認を得て実施した。

#### (結果)

研究参加者は18歳以上の大学生で、男子19人、女子39人、計58人、平均年齢20.2歳であった。X大学は国立の主要大学である。そのため学生は全国各地から入学し、参加学生の出身地は西部36人、東部20人、不明2人であった。

IRSA92項目の行動観察データの記述統計の結果、52項目は天井効果、床効果が認められたため除外された。残り42項目でEFAを行った結果、因子負荷量0.4以上の28項目から構成される4因子が抽出された。第1因子(7項目)はSensitivity、第2因子(8項目)はAssertion、第3因子(7項目)はCoordination、第4因子(6項目)はSelf-Controlと命名した。信頼性係数は、Sensitivityは $\alpha=0.96$ 、Assertionは $\alpha=0.95$ 、Coordinationは $\alpha=0.92$ 、Self-Controlは $\alpha=0.96$ で信頼性が認められた。IRSA28項目(以下IRSA-28とする)の累積寄与率は80%であった。因子間相関は0.43~0.60であった。

基準関連妥当性を検討するために、IRSA-28と他の尺度との相関をみた。その結果、IRSA-28とSSIのピアソンの相関係数は0.45、IRSA-28とENDCOREsのピアソンの相関係数は0.57、IRSA-28とAQのピアソンの相関係数は0.42であり、いずれも中程度の相関が認められた。

#### (考察)

本研究では中国大学生の社会能力はIRSA28項目で4因子構成という結果が得られた。著者は、本研究がベースとしたIRSA92項目が3因子構成であることから、先行研究を引用しながら4因子のうちのSensitivityはCoordinationに含まれる概念であることを考察している。また、IRSAが92項目から28項目に減少した理由についての考察も行っている。IRSAは日本人対象の行動観察指標として日本語で開発されていて、今回の研究においてもIRSAは日本語のまま行動観察評価を実施していることから、文化的背景などからの限界について考察している。

本研究の限界として、先行研究のレビューからは中国社会における社会能力の構造の定義が明示できなかったこと、対象者数が58人であったこと、中国の大学生の社会能力を評価するためには本ゲームは容易すぎたこと、中国人を評価するのに日本語版の評価用具を使用したことなどがあげられ、今後対象者数を増やして、中国語版のIRSAによる行動観察評価の必要性を述べている。

以上の結果から、著者は、本研究により、4因子から構成されるIRSA-28は信頼性と有効性が検証され中国の大学生の社会能力を評価できることが示唆されたこと、中国の大学生の社会能力評価では、Assertion、Coordination、Self-Controlの3因子と同様にSensitivityは不可欠な因子である可能性があることと結論付け、大学生の精神健康支援のための一助として活用できることが示唆されたとしている。

## 審査の結果の要旨

## (批評)

本論文は中国の大学生の社会能力を評価した研究である。Part1 では中国の成人や大学生対象の社会能力に関する先行文献のレビューを行った。そして、その結果を踏まえて、Part2 では、日本語版の社会能力発達評価「成人用かかわり指標」を用いて、中国大学生の社会能力の行動観察評価を行った研究である。先行文献レビューより、中国ではこれまで社会能力を行動観察で評価した論文は皆無であったため、大学生の社会能力を行動観察で評価するという本研究は、中国では新規の方法で実施された。その結果、「成人用かかわり指標」は 92 項目から 28 項目に精選され、4 因子構造であるという結果を導き出している。また、今後の課題として、十分なサンプルサイズが必要であること、文化の影響を排除するために中国語版 IRSA での実施の必要性等が示されている。

近年、大学生の精神的健康問題が増加している中国において、大学生の社会能力に着目し、その評価項目を明らかにした本研究は、大学生の精神的健康問題の解決を支援する立場にある看護職にとって、活用できる知見を見出している点で価値のある研究と考えられる。

平成 26 年 12 月 17 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（看護科学）の学位を受ける資格を有するものと認める。